

氏名・（本籍） 井藤 雄一（富山県）

学位の種類 博士（メディア科学）

報告番号 甲 第115号

学位授与年月日 2014（平成26）年3月19日

学位授与の要件 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）

第4条第1項該当

論文題目 情報メディアの利用によるアート表現

—メディアの変則的利用がもたらす可能性—

審査委員（主査） 山田 雅之

長谷川 純一

カール ストーン

上 芝 智 裕

笥 一 彦

審査概要および審査結果（論文）

〈申請者の略歴〉

申請者 井藤雄一氏は、2008年3月中京大学大学院情報科学研究科博士前期課程メディア科学専攻を修了、同年4月同研究科博士後期課程メディア科学専攻に進学し、現在に至る。この間、音響や映像を用いたメディアアートの研究に取り組んできた。

〈学位申請論文の題目変更〉

申請者 井藤雄一氏が2013年9月の審査請求時に提出した論文の題目は「メディア情報を意図的に誤用した音響作品と映像作品の制作」であったが、第1回予備審査会において、論文題目と論文内容を慎重に検討した結果、論文題目をよりふさわしいものに改めるよう指導した。同氏はこの指導に従い、論文題目を「情報メディアの利用によるアート表現—メディアの変則的利用がもたらす可能性—」と変更することを希望し、審査委員会はこれを了承した。

〈学位申請論文の内容と評価〉

申請者 井藤雄一氏が提出した論文「情報メディアの利用によるアート表現—メディアの変則的利用がもたらす可能性—」は自身が制作した2種類のメディアアート作品を取り上げ、それらの制作方法と作品の芸術性について論じている。

1章では、本研究のテーマである「情報メディアの変則的利用法による作品制作」の意味について説明している。そこでは、映像音響機器を誤って接続したり、データの一部が欠損した場合に起こるエラーやノイズを伴った映像や音響を一つの芸術表現として利用することができ、そのような映像、音響を意図的に再現して作品制作を行う手法であると述べている。

2章では、情報メディアを変則的に利用した作品制作手法としてサーキットベンディングとデータモッシングを取り上げ、これに関連する作品群を、表現形態および変則的利用の明瞭性の観点から分類するとともに本研究のメディアアート分野における位置づけを述べている。

3章と4章では本人による2種類の作品を取り上げ、制作意図、制作手法、作品の芸術性や意義をそれぞれ述べている。

3章では、コンピュータの映像信号を直接アンプ等に接続して音響を生成する映像音響パフォーマンス作品について述べている。この作品はコンピュータを「音を発する道具」として鑑賞者に意識させることを意図し、作品が有する映像音響の高い調和性がそれを可能にすると主張している。これを検証するために、2011年 AAC サウンドパフォーマンス道場に入選した際の審査員の評価や観客のコメント、別途行ったアンケート調査の結果を分析している。

4章では、データモッシングという手法を用いた作品について述べている。ここで、データモッシングとは動画圧縮データの一部を無効にして再生し、ノイズや残像を伴う映像表現を実現する手法である。本論文はその原理を解説し、フレームの再生順序と生成される映像表現の関係を明らかにしている。また、2012アジアデジタルアート大賞に入賞した動画作品を取り上げ、その映像表現の効果を分析している。

5章では、3章と4章で得られた結果に基づき、情報メディアの変則的利用法によって得られる表現の芸術性や作品の意義を統合的に考察している。

以上のように本論文はノイズやエラーを用いたアートを「変則的利用」という枠組みで捉え、自身の映像音響作品を通してその芸術性や意義を論じたものであり、この研究成果および研究手法はメディアアートを含むメディア科学の発展に寄与するものと考えられる。

〈研究推進に対する評価〉

申請者 井藤雄一氏の学位申請論文に関連する作品は2012アジアデジタルアート大賞を含む2つのコンテストで入選している。関連論文は LNCS Transactions on Computational Science、映像情報メディア学会誌に掲載され、また、複数の国際会議において発表されており、学術的に高い評価を得ている。

〈審査結果〉

申請者 井藤雄一氏が提出した学位申請論文は、課程博士（メディア科学）の学位論文として適格であると判断し、全員一致で「合」と判定した。

審査概要および審査結果（最終試験）

1. 口頭試問の実施

当審査委員会は、最終試験にかえて、2013年10月27日の第1回予備審査会、同年12月15日の第2回予備審査会、および2014年2月18日の公聴会において、申請者に論文内容に関する口頭発表を求めるとともに、専門分野における学識と研究能力を審査するための口頭試問を行った。

2. 既発表の作品および既刊論文の調査

当審査委員会は、2013年9月の学位審査申請時点および2014年2月18日の第3回審査委員会時点で、申請者が制作し、かつコンテスト等で入選した関連作品、および申請者を筆頭著者とし、かつ第三者の査読を経て採録もしくは採録が決定している関連論文を調査し、以下の2つの作品および4編の論文がそれに該当することを確認した。このほかに、16の作品を発表し、国際招聘展示・公演を5回、国内招聘展示・公演を13回、自主展示・公演を3回行い、条件付採録論文が1編、国際会議論文が1編、口頭発表論文が2編ある。

（入選作品）

- [1] 井藤雄一：fmiSeq, 愛知芸術文化センター企画事業実行委員会, 第5回 AAC サウンドパフォーマンス道場, 入選, 2011.
- [2] 井藤雄一：Don't flatten. part 2.1, 九州大学感性融合デザインセンター, 2012アジアデジタルアート大賞, カテゴリー A 動画部門, 入賞, 2012.

（学術雑誌論文）

- [3] Yuichi Ito, Carl Stone, Masashi Yamada and Shinya Miyazaki: Audio-Visual Art Performance System Using Computer Video Output Based on Component Video Signal to Audio Conversion, Transactions on Computational Science XXIII, LNCS 8490, pp.157-177, 2014.
- [4] 井藤雄一, カールストーン, 山田雅之, 宮崎慎也: Web カメラの入力を用いたリアルタイムデータモッシングの表現手法 (研究速報), 映像情報メディア学会誌, Vol.67, No.11, pp.J413-J416, 2013.

（国際会議論文）

- [5] Yuichi Ito, Carl Stone, Masashi Yamada and Shinya Miyazaki: Datamoshing Technique for Video Production, The Society for Art and Science, Proc. of NICOGRAPH International 2013 CD-ROM, pp.60-71, 2013.
- [6] Yuichi Ito, Carl Stone, Masashi Yamada and Shinya Miyazaki: Audio-Visual Art Performance System Using Computer Video Output Based on Converting Component Video Signal to Audio, Cyberworlds2013 CD-ROM, pp.356-363, 2013.

3. 最終試験結果

当審査委員会は、上記1. および2. の結果から、申請者 井藤雄一氏は専攻分野における十分な研究資質を有すると判断し、全員一致で「合」と判定した。

審査経過

審査経過：

2013年9月18日(水) 論文受理、学位審査委員会設置

2013年10月27日(日) 第1回予備審査会(口頭発表、口頭試問) 第1回審査委員会

2013年12月15日(日) 第2回予備審査会(口頭発表、口頭試問) 第2回審査委員会

2014年2月18日(火) 公聴会(口頭発表、口頭試問) 第3回審査委員会

2014年3月3日(月) 審査結果報告、投票による合否判定